

現在、福祉の仕事がメディアで多く取り上げられるようになり、就職氷河期と呼ばれる昨今でありながら、この仕事は人手不足に悩まされているのが現状である。そこで、一般的に人がやりたがらないと思われがちなこの仕事のやりがいというものは何なのかを探るため、同じ障がい者自立支援施設で働く5人にインタビューを行い、さらに他施設で働いていた女性1人にインタビューし彼女のライフヒストリーをまとめた。

彼らがこの仕事を始めたきっかけは、学生時代から福祉関係の勉強をしていたり、親族に自立支援施設で働く人がいたり実際に障がいを持った兄弟がいたりなど、急に思い立って始めたわけではなく何かしら関わりを持っていてこの仕事をするに至ったという共通点が見られた。

印象に残ることはそれぞれではあるが、利用者（障がい者）との関わり、同僚との関わりなど人間関係という点は共通していた。苦労したことは、安月給や異動が多いことなどの仕事環境や、利用者や同僚との人間関係などが挙げられた。自立支援の仕事を通じての自分自身の変化は何かと聞くと、人間としての中身の成長という回答が共通していた。

調査協力者の中で、世間が抱くイメージに納得がいかない人も少なくはなかった。障がい者との関わりがなかった、また、障がい者という存在を詳しく知らなかったとはいえ、この世界を知らない人はメディアが植え付けたイメージだけをただ鵜呑みにするのではなく、この世界に一度でも関わってみるべきであり、自分の目で見てふれ合った印象を真実として受け止めてほしいと彼らは感じている。この仕事を体験しない限り、この世界を理解するということは難しく、なかなか関わる機会がないかもしれない。だが、もしこの世界と関わるができる機会に遭遇したとしたら、積極的に感じ取ってほしいと彼らは望んでいる。

「自立支援」とは、私たちがする普通の生活では考えられない世界で、施設内は集団生活が基本であり、入所しているすべての利用者を偏ることなく平等に見なければならず、自分が他の利用者より重度の障がいを持つ利用者を優先したいと思っても特別視できない環境に対し、自分のしたいことと支援業務としてやらなければならないことの違いに葛藤が生じる。しかし、その葛藤に屈せず支援業務を続けていき、より多くの利用者を社会に旅立たせていくことにやりがいを感じ、その利用者の成長とともに自分自身も人間として成長していていることを肌で感じ、それもまたこの仕事のやりがいへと繋がっていく。この2種類の「成長」というものがやりがいになるのが、この「自立支援」という仕事なのである。彼らは、私たちの当たり前がいつか障がい者にとっても当たり前になっていくことを理想としていた。